
おやっさんが死んじまっちゃ！

暮音孤

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

おやつさんが死んじまっちゃ！

【Zコード】

Z2370Q

【作者名】

暮音孤

【あらすじ】

人間には存在していなかつたものを現出させる力が備わっている。想像上の生物あるいは未確認生物しかり。中でも既に存在する人類とは異なりながらも知能をもつ生物は、いずれも様々な知覚が可能な人間が想像し、創造してきた。

では、人間がその存在を否定した時、その生物はどうなるのだろうか。知性をもつがゆえに危機感を覚えているのだろうか、幻の人間たちの日常は果たして……。

第一話・アイツは転入生（前書き）

この作品はフィクションです。
作中に登場する人物・団体といった固有名詞は、私たちの世界の
ものとは関係を一切持ちません。

第一話・アイツは転入生

一月十一日、新しい年が明けてまだ一週間も経たない微妙な時期に、アイツは転校してきた。

担任教師に連れられて、壇上に進む。敢えて青色のチョークを探して、アイツは黒板に名前を書いた。

「よ、よろしくお願ひします！」

緊張のあまり上擦つた声が、起きているクラスのヤツらから笑いを引き出した。

むくりとその騒がしさに田を覚ました一人が黒板の前に立つアイツを見て、

「アイツ、誰？」

再び大きな笑いが生じた。

「知らねえんじゃないのか、アイツだよ」

「あん？」

状況が分からぬ生徒に、アイツは改めて自己紹介を行った。
「アイツ・ツクモ 藍都白です。

今日からこちらの学校に転入することになりました。よろしくお願いします

「アイツ？」

「藍都です。ツクモと呼んで下さい」

「『白』で『ツクモ』？ 何で？」

それもアイツには慣れっこだった。

「両親が変わり者なもので……」

(僕は名前に訊かれた時は必ずそう答えるようにしていた)

しかし、蒸し返すような発言をする輩はどこにでも一人はいるようだ

「想像だが、藍都君の『両親は『百』とでも付けようとしたんじやないかな」

無駄に知識のある大人が口を挟んできた。

(ウザッ。だが、お前に本当の由来を教えるつもりはないからな)
「先生、解答待ってワクワクしてんなよ！」

だからといって、クラスメイトの一人が担任をたしなめる光景に、
アイツは呆れていた。

(なんて、フランクな学校だ)

アイツが担任の方を見ると、恥ずかしそうにコホンッと喉咳を吐
いた。

「えー、藍都君のクラスメイトの自己紹介だが……」
担任は腕時計をちら見して、言い濶む。

「一限が私の授業だから、そこで行うことにする。藍都君は真ん中
の列の一番後ろに座りなさい。朝のホームルームは以上だ」
と、そこへ響く足音。

ダツ、ダダツ、ダダダツ！

アイツが指示された席に向かつて、アイツへの一切の注目が途切
れたその時だった。

教室の、教卓側の引き戸が開くのとほぼ同時に、
「おやつさんが死んじまっちゃ！」

女生徒が怒鳴り込んできた。

アイツが、たぶん勢い余つて噛んだんだろうとか思いつつ、振り
返ればポニーテールが目を引く雀斑そばかすの女の子が息を上げて、立つて
いた。

噛んだことを引き摺るタイプに見える女の子だったが、ただ余裕
がないのか、爛々と輝かす瞳が、アイツにはただただ怖かった。
「阿谷瀬香澄。アヤセ・カスミ」アイツはアヤセ、担任に次ぐ変わり者だと思うよ

アイツの席から数えて、右と前に一つずつのところに座る小柄な
男子がぼそりと呟くように教えてくれた。

(彼女の名前を教えてくれたことは感謝するが、要らん言葉を呟か
れだし。しかも寝たふりかよ。お前の名前は何だよ)

アイツは名前を知つたら連呼することを心に誓つた。

「おほよ～？ あたし以外に立つてゐる君は、見掛けない子だね。ん、何ですと、転校生？ これは訳ありかな？」

（お遊戯でウサ耳を表すような手の形のまま、耳に当てた姿は、ただからさまで耳をそばだてているというよりも、ゲームの女勇者のように思えた。まったく勇ましくないけども）

「藍都白です」

「おお、ついにトリプル『A』つてことだね、アマノっち」
（イエーイとか、高校生が空氣読まないでとるポーズじゃないからね）

アイツ自身、アヤセが一番の変人であると認めた瞬間だ。
「で、頭文字『A』のよしみで訊ぐが」

（そこは担任として訊けよ！）

転入生だからこそか、あくまでも心の内に留めたアイツのツッコミには勢いがある。

「亡くなつたのは、アヤセ　お前とどんな関係にある親父さんだ？」

一限が始まるまでのわずかな時間に、担任教師　天野高次がアイツの内心に気が付く由もなく、アヤセに回答を促した。

第一話・アイツは転入生（後書き）

読んで頂き、ありがとうございます。

これから隔週（月）投稿を目標として、一話あたり一千字前後で頑張ってまいりますので、お付き合い頂けたら幸いです。

第一話目から一週間と一日投稿が遅れてしましました。とりえず、全体としては十話目標です。

第一話・イッシュも血口紹介（前書き）

この作品はフィクションです。作中に登場する人物・団体といった固有名詞は、私たちの世界のものとは関係を一切持ちません。

第一話・イシマテも自己紹介

一月十一日　アイツの転入初日は、アヤセの登場と共に、雰囲気がガラリと変わってしまった。

「アヤセは遅刻してくると、だいたい誰かの不幸を口にするんだよ（はた迷惑な。いや、だから名前を教えるって！）」

一限開始のチャイムが鳴る頃には着席したアイツに向かって、右に前に一つずつずれた位置に座る男子が教えてくれる。

（良からう、右前一各と分かるまで呼んでくれよう）

これからクラスメイトの自己紹介が始まると、アイツは仮の名前が決まって満足げだ。

「よつし、では、これから自己紹介を行つ。まずは私から行つぞ（あんた、担任じやん！ 嬉々として言うなよ）

アイツがどう思えど伝わる訳もなく、担任教師は名前に始まり、誕生日や趣味、家族構成を話していく。

「いよつ！ アマノつち、最高！」

（何が？ 職員室で話してくれたままなら、一年の頃から誰かが転入していく度に聞いてんだろう）

「……天野高次。^{アマノ・コウジ}一年の頃から持ち上がりの担任教師。六月九日生まれ」

右前が相変わらず、副音声のように通る声で話す。

（いやいやいやいや。今、自己紹介してるから）

「前回は、私たちが一人息子の一平を授かった、という所まで話したな。

今回は小学四年生になった所から話そつな

（ちょっと待て。息子の話を始めたら、もはや自己紹介とは）

アヤセが合いの手を入れるものだから、アマノが調子に乗る。見回せば、櫻を漕いでいるのは、止まらないアマノと笑うアヤセ、そしてアイツだけになっていた。

(転入初日、その一限から授業で居眠りをせよと仰せか 神は!)

一応この仕打ちを嘆くも、立ち上がるような真似はしない。アイツはただ椅子に座つたまま、仰ぎ見る。

(ああ……天井だ)

小さい穴が均等に並ぶ白いマスが幾つとなく貼り付く天井を見上げて、

(寝よう)

アイツは睡魔に襲われた。

気が付けば、九時半を過ぎたところ。

アマノによる自己紹介はまだ続いていた。板書まで行い、気の入り様が伺える。

(あー……、眠い眠い)

「天野高次の息子は中一に在籍している。話しの中に出でた真衣は家で留守番をしているらしい」

「それは会いに行けどでも暗に言つてこいるのか、右前?」「不法侵入はよろしくない」

思はばかりでは何も伝わらない。声音を低く小さく、右前に告げるが、アイツはまともらしいことを返された。

(お前がそれを言つのか?)

力力カツヒチョークを黒板に三度連打される音が、右前の言葉に訳も分からずヒート寸前だった脳回線を急速冷凍させた。

「……とこうことがあり……、おつと後一分で授業が終わるな。藍都君はこの紙で名前を確認しなさい」

アマノはムクリと目を覚ました生徒たちに紙を回させた。

アイツの手元に届いた紙には「座席表」と。

(……)

「名前以外に情報は入れてあるが、分からなかつたら、授業時間外で積極的に話すんだぞ。

それが早く覚える秘訣だ。

今日は最初だから大目に見るが、次回以降のお喋りは禁止だ。喋るくらいなら寝ろ」「さつすが担任だね、アマノっち

抜け目がないね、とアヤセの合意の手が入る。

「お前もだ。家の裏と言えば、上納里さんだろ？？」

もしもピンピンしてたら、反省文を出してもらうからな

アマノは言いたいことを伝えると、出席簿をつけて教室を跡にした。

「そりゃあないよ～、アマノっち。そう思わない、ツクモ君？」

（阿谷瀬香澄……人間。誕生日二月末日。御歳十五）

アイツは手元の座席表でアヤセの情報を確認した。

（『人間』ってなんだよ！ 当たり前じゃん！）

だが、違うのかも知れないと、口に出そうになるのを喉を鳴らして飲み込んだ。

そこへ数人の壁を越えて、アヤセがやつてきた。まだ義務教育も終わらない中学三年生だからかも知れないが、胸元の膨らみが気になることも、体型に惹かれることも、顔から目が離せないということも、アイツにはなかつた。

覗き込むアヤセ。

「へえ～、ツクモ君は『ハーフ』なんだね。何のハーフ？」

黒人さん？ 白人さん？ にしては黄色だから……分かつた、モンゴロイドかアジア系？」

（最後が疑問符とは、これまたベタな）

「つて、僕の両親は日本人だからさ！」

「じゃあ、紋吾郎モロコと文子モコの子どもなんだね。あたしは」

マシンガントークという程ではない。けれど、けらけらと異様に疲れの溜まる喋り方だつた。

アイツは右前に助けを求めようと首を向けたが、席に右前の姿はなかつた。

「あれれ？ ツクモ君は曲路君マガリジのことを知つてたの」

(マガリジ?)

アヤセの指差す先は右前の
座席表を確認すると、^{マガリジ・トオル}曲路通とあつた。

第一話・イシマトも血口紹介（後書き）

お読み頂きありがとうございます。一週間かかる必要のある内容か
は疑わしいところですが、慣れない連載ということで、大目に見て
下さい。次話は2／14（月）予定です。

第二話・ウゼンは曲路通（前書き）

この作品はフィクションです。作中に登場する人物・団体といった固有名詞は、私たちの世界のものとは関係を一切持ちません。

第三話・ウゼンは曲路通

(曲路通……人間。三月三日生。)

「へえ、ツクモはトオルを知つてんか」

「アソシの席から、左に一つ前に一つの位置に座る男子生徒がアヤセの驚きに反応した。

男女が交互に座る面白みの欠片もない席順を眺めていると、

「俺、佐野間江馬。天野的分類では『人間』だ」

椅子から体を離さないまま、佐野間が話しに割り込んできた。

(佐野間江馬……人間。四月四日生まれ。昨年転入)

「サノマっち、おつはよー。みゅふいひひ、やつぱり転入の先輩としては新入りが気になるのかな?」

「なあ、トオルとはどんな関係なんだよ? 俺もあんまし話したことなくつてよ」

「トオル君はね、人見知りする鼠に睨まれた子猫って感じだつたんだよ~」

「なあ、ツクモ。トオルはどんな奴だ?」

「にやによ。あたしは無視かい、おやつさん!」

「俺はお前と同じ年だ、おばっさんが!」

(アヤセ的分類では、男はおやっさんか)

おいおいと、アソシが思つたりしていると、曲路が戻ってきた。

「アソシはやけに通る声で副音声を垂れ流すのが得意らしいな」

「……」

(何だ、この沈黙は)

「ああ、トオルのことか」

「自分の名字を付けて話すから、何話しかやつてるんにょ? とか

思つちやつた」

佐野間、アヤセの順で話しの途切れた理由を続けた。

「姓で呼ばれても無視するから、そのうち慣れるよ」

曲路が自席に座る。

「そういえば、上納里のおやつさん、だつけ？ 何で亡くなつたことにしたの？」

「ツクモは越してきたばかりだから当然だけど、間違いないく、アヤセに向けた質問だったが、佐野間が答えた。

上納里さんは小太鼓を趣味としており、雨で外出が億劫な日に鳴らす老人 雨天限定の迷惑じじいだそうだ。

「歳いつちやいるが、妖怪雷小僧つてここのらじや有名なんだよ」「サノマっち。メタモルフォーゼなんてているはずないよ」

（だから、けらけら笑わないでくれ）

「アヤセ。いくら海外に短期留学してたからって、無理矢理英単語を使うなよ」

そこへ副音声。

「阿谷瀬香澄は昨年の夏休み、アメリカに渡っていた。一学期と同一人物とは思えない、……今の性格になつていた」

どこか寂しげな物言いな曲路だった。

アイツがそんな説明に耳を傾けていた間に、アヤセと佐野間の会話が続いている。話題は、アヤセの問題発言から妖怪実在論争にまで移っていた。

（どうでもいいから。いねえよ、妖怪なんざー）

アイツは肩を落としながら、一人の会話を左の耳から右側へ通過させることに徹した。

「一限は……」

「前」

指を差された訳でもなく、曲路の声に沿つて黒板横のスペースを見て、アイツは絶句した。

ここは小学校か！

そう突っ込むのを忘れる驚きがそこにはあった。

時間毎に仕切られた時間割表。休み時間までかつきり書き込まれ

たそこに、本田一限は「保健体育」と、加えて「ほけんたいいく」と読みまで振られて、手書きされていた。

「佐野間。中学つて、保健あつたか？」

「さあ、「

佐野間は関心なさそなながらも、アヤセとの会話を中断させても応答した。

(意味ないけどね!)

「つていうかねん、ツクモ君。あればブラフだから~

「そうそう。次は古文なんだよ」

「はい?」

ブラフ。

脅しあるいははつたりのこと。

毎度のことながら、曲路の弦くには「副担任の仕業」と。

(……副担任、佐鳥夏菜。サトウ・カナ保健医)

「佐鳥先生がね、毎日ほんわか~な気持ちになれるよつ~つて温かい時間割表を作つて貼つたんだよね、あれば」
にしし、と笑うアヤセが眩しい。

佐野間が同意を示している。

「古文の先生はおじいちゃんだから、挨拶したら?」

(一限の居眠りに続き、一限はバックレとな)

もはや、吹つ切れたアイツは立ち上がるなり、教室に入ってきた老人に腹痛を伝えて廊下に出た。

何故か曲路もいた。

「授業は?」

「保健室の場所、知つてる?」

「……」

第三話・ツヤンの曲路通（後書き）

お読み頂き、ありがとうございます。今回もどうか間に合わせることができました。ちょっとばかり、予定と違う展開になつてているのですが、進む方向に問題はありません。佐野間君を登場させた目的が曖昧になつた程度です。次話更新は2/28予定になります。

第四話・ヒマは真四角（前書き）

この作品はフィクションです。作中に登場する人物・団体といった固有名詞は、私たちの世界のものとは関係を一切持ちません。

第四話・ヒマは真四角

アイツはときおり聞こえる副音声」と曲路の説明に耳を傾きながら、校内を歩いていた。

「左側 常磐木がかるうじて見える」

曲路の言葉に、アイツは自然と窓越しに見える木に注視した。寒さと霜に苦しみを覚えているようにも伺える、深く刻まれたひびに似た幹の風格に幾ばくかの疲れが感じられもする。しかし、青々とした広葉を枝に付ける木 常磐木は感知せずの姿勢を崩さない。

「それが？」

「意味はないよ。ただ、見えたから」

ぼそりぼそり、それが曲路の話し方の特徴だが、何故か内容は明瞭に聞こえるものだからアイツは不思議に感じる。

(……そうか)

引っ越ししてくるにあたって、アイツはこの一帯のことも調べていた。

常磐木のことも。

住民に親しまれている地域のシンボルだ。

(初めて見たけど、いまは一月のはずだけど、違和感ねえな)

アイツは常磐木に吸い付く視線を、頭を振つて、引き離した。

「左側」

(ん……)

「保健室」

そして、本来の目的地へと到着した。引き戸を開くと、薬品棚に

体を向けていた白衣の女性が振り返らずに応じてきた。

「アイツ・シゲモ藍都白君。仮病に付ける薬は鎮痛剤じゃないわよ」

声から推測するに、四十半ば。櫛では梳ききれない絡み合つ髪は

痛み気味だ。

「仮病使つて、さぼる生徒を相手にしないといけないからね。でも、古文だから、真四角君の対応が正解かしら」

「ましかくん？」

「佐野間江馬の通称」と、曲路。

「うましか君よ。クラスの女の子が付けたの」
教育者ながら、「上手いわよね」とアイツと同世代くらいの感覚で笑いかける。

振り向いた女性には小皺サトリ・カナが数本見て取れた。

(勲章……でいいかな)

「初めてまして、副担任の佐鳥夏菜です。女性の年齢はいつだって秘密よ」

「藍都白です。あの……」

「白衣着たつて、わたしは副担任よ」

アイツの質問を聞く前に、種を明かす。

「でも……」

しかし、アイツは納得しなかった。

「はあ……天野先生は」

「某映画の登場人物の名前をつけたんだな、つて数年前の作品をあげましたよ」

「ハクつて呼ばれたんだな」

数年前は小学生だろうに、とアイツは呆れ、

「天野先生はボケたところがあるから」

仕方ないわ、と佐鳥は自己紹介を終わらせようとして

「だって、わたしのところ、『ハイブリッド』ってないかしら?」

しなかつた。アイツの手にしていった座席表に佐鳥の視線が当たっている。

副担任に決まった席はないが、申し訳程度に左隅に名前が、そして席に似せて四角く手書きで囲まれていた。

(佐鳥夏菜 サトリ・カナ……年齢不明。誕生日不明。『ハイブリッド』……確かに)

「天野先生は『ハイ』が付いていれば高級とでも思つてゐるのかしらねえ」

困つた子ねえ、と腕組み口元に手を当てる。

「でも、だから、娘を預けたんだよね？」

(曲路……それは馴れ馴れしいだろ)

「あら、いらしていたの？」

曲路の友達言葉に、いくら何でも相手は教師と、返つてくるであろうたしなめか説教じみた小言に警戒していたアイツは、予想に反する応答に、それを呴いていた。

「……敬語？」

「佐鳥先生を籠つた三笠^{ミカサ}の知り合いだからだよ」

曲路がしつかりと補足する。

「天野三笠^{アマノ・ミカサ}。よく分からぬふざけた好々爺のことだよ。それから、天野高次の親戚」

次第に置いて行かれていくよつた不安がアイツの背後に忍び寄るも、口を挟む機会は巡つてこない。

「三笠小父様はそれは不思議な魅力のある

「あれは単なる助平爺だよ」

(天野三笠つてやつは、そんなに重要人物なのか?)

「重要です、白君」

「皆無だよ、関係ない」

佐鳥と曲路は、アイツの脳裏に浮かんだ言葉を拾い上げてはまるで反対のことを言い合つ。

(つて、心読んでるだろ!)

「読んでないわよ! と、あららり」

しまつた、と口を噤むも曲路が追い打ちを掛ける。

「やう、佐鳥先生は心を読むことが出来る。指向性のあるものだけらしこけど」

「妖怪……サトリ?」「

「違うわ。でね、天野三笠は常磐木の柳田國男なのよ
『言ひ過ぎ。三笠はただの流れ者』」

「まあ、いいわ。何でも

（お前が言つなよ！）

「佐鳥先生が良いなら」

（お前もか！）

一気に脱力感の襲うアイシに、佐鳥は曲路のようにぽつぽつと言つた。

「妖怪はいないわ。でも、人間の想像力は時にすげに創造力に変わ

るの」

そこに、曲路が言葉を重ねる。

「そして、逆もあり得るんだよ、ツクモ。阿谷瀬の裏の家の名前を
覚えているかい？」

（確かに、上納里とか）

「阿谷瀬さんの裏は上山さんよ」

それは違つ、アイツは反論しようとついた。

だが、曲路に真っ直ぐ見上げられて、返す言葉をついに口から吐
くことは出来なかつた。

第四話・ヒマは真四角（後書き）

お読み頂き、ありがとうございます。前の話で誤った展開を、少々強引に戻してみました。形は変わりながらも、主要な登場人物を出せたと今は満足しています。次話更新は3／14予定になります。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2370q/>

おやっさんが死んじまっちゃ！

2011年2月28日01時55分発行